

# 池田仁子著『加賀藩社会の医療と暮らし』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-05-11 キーワード: 作成者: 萱田, 寛也, KAYATA., Hiroya メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00069565">https://doi.org/10.24517/00069565</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



新刊紹介

池田仁子著

『加賀藩社会の医療と暮らし』

萱田寛也

本書は、加賀藩領、特に金沢における生活文化（生活の中にみる文化的要素を含む暮らし全体）と医療について精力的に分析してきた池田仁子氏（以下、著者）の三冊目の著書である。章構成は以下の通りである。

- 序章 研究動向と本書の構成
- 第一章 初期藩主前田家の病と治療・医家
- 第二章 幕末期前田慶寧の退京・治療と政治史的動向
- 第三章 藩主前田家の医療と医家
- 第四章 藩の医療政策・医学教育と社会的意義
- 第五章 藩老横山家の家臣と家族  
— 陪臣の分限帳と出生関係史料にみる —
- 第六章 城下町の暮らしと医者
- 第七章 庭の利用と保養・領民

第八章 能美郡安宅船の朝鮮漂流と暮らし

第九章 村々の生活文化と医療

— 能美郡等諸史料の紹介と問題点 —

終章 本書の成果と今後の課題

続いて各章の内容について述べる。

序章では、著者の二冊目の単著『近世金沢の医療と医家』（岩田書院、二〇一五年）刊行から平成二九年（二〇一七）三月までに発表された加賀藩研究の動向について概観するとともに、本書の視点や目的について述べている。著者は、近年の加賀藩研究は藩主・藩士・農工商などの階層、藩政・経済・社会・文化・教育など多方面にわたってテーマの掘り起こしが成されていると述べている。その上で、藩主・藩士・領民がどのような医療を受け、生活を営んでいたのか、という点については、研究が充分でなく、一次史料を駆使して考察を深める余地があると指摘し、本書のテーマに設定している。また、本書の位置づけは、他藩や他地域との比較検討による普遍化を見出すための基礎的研究であると述べている。

第一章では、近世初期の加賀藩主（前田利家、利長、利常、光高）やその家族の病氣治療の実態について、診察を

担当した医師の経歴にも留意して述べている。藩主の治療に際しては、徳川家や豊臣家から医師が派遣されて治療を行っていた、徳川家と前田家の間により強い緊張関係が見られることを指摘している。

第二章では、元治元年（一八六四）に退京、謹慎した次期（一四代）藩主前田慶寧の治療に関する記録「拝診日記」を主に用いて、慶寧の退京、謹慎、病気の治療について考察している。まず、出京以前より慶寧の体調は万全ではなく、その上、京都守衛を担った重庄から更に体調が悪化したことを指摘している。そして、慶寧の謹慎中の治療は、三三人の医療スタッフが昼夜三交代で担当していて、蘭方薬も処方されたことを明らかにしている。また、慶寧の退京理由は、表向きには長州藩との戦鬪回避とされているが、慶寧の病状が重症であったことも大きな要因であったのではないかと指摘し、政治史に医療面を照射することの重要性を主張している。

第三章では、二代藩主前田利長、生母の芳春院、正室の玉泉院の治療に関する未刊史料を紹介するとともに、近世全体を通じた藩主前田家の病気治療や担当した医師の動向について述べている。まず、初代～四代藩主の病気治療において、藩医（藩が雇った医師）が関与していると思われる

る事例は少なく、徳川家からの幕医（幕府が雇った医師）の派遣が顕著であること、その背景に徳川家が幕医を派遣することで、前田家に恩を売り、前田家の動きを監視しようという意向があったのではないかと指摘している。五代藩主以降は、藩医が治療に関与する事例が増えるが、加賀藩内の医師（家中医（加賀藩の家臣が雇った医師）、民間医）、京都、他藩の医師、蘭方医を治療に参加させる場合もあり、より優れた治療を前田家が求めていたことを指摘している。

第四章では、医療を通して近世都市社会を考察するため、金沢における医療を取り上げ、その社会的意義について分析している。具体的には①寛文一〇年（一六七〇）に創設された非人小屋での医療体制、②藩校明倫堂での医学教育、③金沢における医師の数、④町医師開業試験、⑤災害や疫病流行における加賀藩の医療対策について取り上げている。①について、非人小屋には町医師である御用医師や藩医が複数人常置され、入所者を治療したこと、②について、明倫堂では医学教育が月三回行われ、その内一回は本草学が教授されたこと、③について、幕末期に向けて医師の数が増える傾向にあったこと、④について、医師開業者が増加したため、天保十一年（一八四〇）以降、藩校で藩

医による医師開業試験が行われたこと、⑤について、災害や疫病の流行に際して、医師の派遣や薬の配給の事例があったことを紹介している。そして、城下町金沢は、藩領内の医療において重要な役割を担ったことを指摘している。

第五章では、加賀藩重臣の横山家における明治元年（一八六八）の分限帳と出生関係文書を取り上げて、陪臣と家族について考察している。分限帳の分析により、横山家には給人として家老役組頭、小將頭、平士、医師がいること、幕末維新期の横山家には六〇〇人を超える家中がいたと推測されること、与力は直臣と陪臣の中間的な独自の位置にあったこと、女中や馬も分限帳に記載されていることを述べている。同家の家中医について、明治元年には七人いて、騎馬の人数に含まれていること、文政六年（一八二三）時点では五人いて、その内三人が戦時に出陣することが決められているので、医師が戦時における負傷兵の手当のために重要な役割を担ったことが推察されると述べている。同家の出生について、明治時代になると諸祝は簡略化される傾向にあったが、明治三年の茂樹出生の際の諸祝の分析より、懐妊を大いに祝うことに変わりは無かったと指摘している。

第六章では、城下町金沢・小松を中心に、加賀藩の人々の暮らしのなかの医療と医者について、蘭学学習者及びその周辺部分と町の暮らしの事例に注目して考察している。武家の出産について、横山家では出生児一人に対して同家の家中医など複数名の医師が、医療スタッフとして胎児の時から診療に当たっていること、文化期の金沢城再建普請では、和漢蘭折衷医や蘭方医が怪我人や病人の治療にあたったこと、瑞泉寺住職家族の治療には複数の医師が関わっていること、金沢で薬種商を営む亀田家では、様々な祝いや恵比寿講に医師が呼ばれていて、その背景に薬種商にとつて医師は絶好の得意先であったことを挙げている。また、金沢に居住する医師の「いろはガルト」が近世後期に作成され、戯言・遊びとして医師総体が人々の暮らしの中に溶込んでいたことを指摘している。

第七章では、加賀藩における近世初期から幕末期までの庭の利用と行歩について、保健医療・福祉の側面から考察している。加賀藩主は、金沢だけでなく、江戸藩邸、大坂城、参勤交代の途次においても庭を利用していったこと、加賀藩では庭は保養、リハビリ、鑑賞、遊覧、身体の鍛錬、地震の避難場所など多様に利用されていたことを明らかにしている。また、領民は、藩主や上級家臣の庭の拝見を許

されることがあり、自身の作庭に役立てていたと指摘し、庭には、一人の保養・養生や心身の鍛錬から、次第に多数での心身の鍛錬・遊覧・娯楽と多目的に利用され、やがて近代の軍事訓練、娯楽・催事、多種の祭礼へと展開していくという見通しを立てている。

第八章では、能美郡安宅における海運業と環日本海の大難事故の一例として、当地の与三次屋平兵衛の持船神徳丸の朝鮮漂流について考察している。各所で嚴重な事情聴取が行われたため、神徳丸は、朝鮮から帰還するまでに二年近く経過していて、近世後期の朝鮮漂流の事例の中で最も長期に及んでいること、漂着から帰還までに、釜山の倭館を通して朝鮮や対馬藩から衣食住の必需品が給与されていて、人道的な側面が見られることを指摘している。また、船主の与三次屋平兵衛家は、朝鮮漂流後すぐに衰亡するには至らなかったが、平兵衛の死後、当家の海運業は廃れたこと、一類の与三次屋吉蔵家が発言力を増し、繁栄するようになったことを明らかにしている。

第九章では、能美郡や江沼郡における生活文化と医療について考察している。最初に同地域内の出来事として、餌指の宿泊、打ちこわし、猪・猿の徘徊、病死人の処置や十村石黒家の人生模様について述べている。続いて疫病流行

において、加賀藩は御貸米を行ったこと、今江村の医師岡山家に医療に関係する史料や医学書が残されていること、近世後期に同地域から各地の医学塾に遊学した事例について紹介している。さらに、宗門人別の分析から同地域における浄土真宗の広まりなど信仰についても言及している。

終章では、各章の内容を総括するとともに、地域史研究においては、細部にわたる具体相の積み重ねが重要であり、多数の事例の集積と比較検討を通して、普遍性を見出すことができると主張している。今後の課題として、入門帳の分析にみる加賀藩領内からの遊学、医療と救恤政策、幕末維新期の医療、儒者・医師ら知識人の動向、藩領内の医師総数の試算、蘭学者らの活動内容を挙げている。

以上が本書の内容である。

本書の意義として、大きく次の三点が挙げられる、第一は、多くの一次史料を用いて論を組み立てていることである。従来の加賀藩研究で多用されてきた『加賀藩史料』について、現在、無批判に使用することに警鐘が鳴らされており（木越隆三・宮下和幸・中野節子「加賀藩研究の軌跡と課題」〈加賀藩研究ネットワーク編『加賀藩武家社会と学問・情報』岩田書院、二〇一五年））、本書も上記の傾向に沿った形で執筆されている。未刊史料の翻刻が数多く本

書に収録されており、藩政史や医療史など多くの分野の研究者にとつて参考となろう。

第二は、前著『近世金沢の医療と医家』と併せて、藩主前田家における病氣治療や、加賀藩領内の医師の動向、城下町金沢における医療の状況が近世全時期を通じて明らかになったことである。前著では未検討となっていた近世初期の前田家、一四代藩主の慶寧の病氣治療の様子について詳しく考察し（第一章～第三章）、地域社会における医療の動向についても分析している（第四章、六章、九章）。

第三は、藩にとつて医療はどのように位置づけられたのか、という見通しが得られることである。第二の点とも関わるが、著者は、前田家を中心に、加賀藩における医療の動向を分析している。他藩の事例では、史料的制約もあり、近世全時期を通じて藩主家の医療や領内の医療状況を分析できる場合は多くない。本書一八頁の「普遍性を引出そう」として急ぐあまり、重要な事例を見落とす危険性は避けなければならぬ」とや「論理を急ぐより確実な史料により確固とした歴史像を描くことが先決」であるという著者の姿勢はもつともなことであるが、本書が分析した事例は、近世医療史研究にとつても非常に大きな成果といえるだろう。

直接的な医療行為だけでなく、周辺の事象も丹念に分析し、近世の人々にとつていかに病、医療が身近な出来事であったのか、詳細に分かる好著である。一読をお薦めしたい。

（二〇一九年二月刊、桂書房、三四四頁、三〇〇〇円＋税）